

読者からの寄稿 <<ミスターEのアメリカエレベーター情報>>

第6回「アメリカで聞いた怖～いエレベーターの話」

こんにちは。ミスターEです。第6回は真冬に怖いストーリーをお伝えしなければなりません。覚悟してお読みください…。

1. 検査中に起きた怖い話

アメリカではエレベーターが完成すると、アクセプタンステストという名の受け入れ試験を行います。かごにおもりを載せ、オーバースピードでキャッチをかけたりする、ちょっとドキドキする試験です。ミスターEの第2回記事（2018年1月号）もご覧ください。私の属する組織の検査官が、その最中に経験した話を、2018年に聞いてきましたのでお伝えします。

その日彼は、エレベーター技術員とともに昇降路をチェックするため、油圧エレベーターのかご上に乗りました。技術員がかご上運転装置を操作し、最上部までかごを上昇させたとき、ちょっとした音とショックを感じたそうです。

何だろうと見まわしてみましたが、よくわからなかったため、かごを下げようとかご上運転装置のボタンを押しました。ところが押せども押せども、かごは一向に下がらない。

かご上の転落防止柵から顔を突き出し、昇降路をのぞきこむと、なんとプランジャーのトップの部分は、ピットにあったというのです。つまり、かごを置き去りにして、プランジャーだけが離れて下がっていたということです。工事のとき、設置をした作業員がかごに固定するのを忘れていたのです。

かごを上昇させていたときの音とショックはなんだったと思いますか？それはガイドレールが短かすぎ、ローラーガイドがレールの先端を超えて、その上に乗ってしまっていたからだったのです。すなわち、彼らがか

ご上運転装置の下降ボタンを押したあとは、かごはプランジャーに置き去りにされ、T型のガイドレールのトップの部分に、ほんの数センチかかった状態で、宙ぶらりんでいたのです！リミットスイッチはいったいどこについていた？社内の完成チェック体制は？疑問は次々にわいてきます。

その後、かご上運転装置の上方向に行くボタンを押すと、プランジャーはかごの重さの負荷がないため、かなりのスピードで上昇してきて、かごの底を打ったそうです。

かご上からどうやって降りたのかって？本当にゴメンナサイ、肝心なところを聞き忘れました。とにかく、その検査官は今もりっぱに生きていて、私にその話をしてくれました。どうにかこうにか降りたということでご勘弁くださいませ。

二重の設置ミスで、死んでいてもおかしくなかったというお粗末な話です。こんなことが起こりえるからアクセプタンステストをおこなって、実際に安全であるかどうかを確認する必要があるのです。エレベーターの仕組みに明るい私たちにとっては、身の毛がよだつほど怖いストーリーではありませんか？

幽霊話を期待していた読者の方、すみません。今回は事故ニアミスのお話です。

2. テレスコーピック プランジャー事故

アメリカ北東部にある、コネチカット州をご存知でしょうか。ニューヨーク州の北側で、ボストンのあるマサチューセッツ州の南側にある小さな州です。この州には大きな岩が点在する地形が見られます。それらの多くは花崗（かこう）岩で、地下にもたくさん埋まっています。ショベルカーなどで穴を掘るとすぐに岩に出くわす

読者からの寄稿 <<ミスターEのアメリカエレベーター情報>>

そうです。

そんな地形の場所では、油圧エレベーターにダイレクト式（直接式）プランジャーを採用すると、掘削するのにコストがかさみます。あまり掘らなくて済むテレスコーピック式（望遠鏡のように段階的に伸縮する。以下：テレスコ）プランジャーが採用されたのは、自然の流れだったのでしょうか。

とある油圧エレベーターには2本のテレスコプランジャーがついていました。しかしそのタイプのエレベーターは、2本のプランジャーが同調しなかった場合、片方だけが早く伸びます。かごは傾いたまま上昇するわけです。上昇するにつれ傾きは大きくなり、ついには事故が起きました。

プランジャーがかごの床を突き抜け、乗客がけがをしたのです。そののち同じ原因で起きた事故では、プランジャーからかごが外れて落下し、複数の乗客が死傷したことから、私の属する組織ではテレスコは禁止になりました。

3. ピット停止スイッチ事故

私の属する組織では、ピットの停止スイッチはボタンを押したときに回路が切れるタイプのものを使用することが義務付けられています。ボタンの色が赤で、ひねりながら引っ張らなければ、復帰しないタイプのものです。（写真1）



写真1 ピット停止スイッチ

このタイプでないスイッチに、ピットのはしごを使って昇降していたエレベーター技術員の体が誤って触れ、ピット停止状態が解除され事故は起きました。

かごは動き始め、その方は挟まれて亡くなったそうです。どうしてかごを停止させる手続きをしてなかったのか疑問は残りますが、写真1のスイッチだったならば、偶然当たってしまったとしてもその方は命を奪われることはなかったでしょう。

写真2のナイフスイッチやトグル（英語ではタゴと聞こえます）スイッチは、事故が起こる可能性があるでしょう。



写真2 ナイフスイッチ

4. エレベーター非常用電話事件

アメリカでも、かごと緊急センターなどを結ぶ電話機は必須です。その場所には24時間人が常駐して、いつでも応答できるようにしておかなければなりません。もし30秒以内に誰も応答しなかったら、その通話は自動で別の人のいる場所に転送されなければなりません。留守番電話にメッセージを残す方式はもちろんNGです。

私の属する組織では非常用電話が故障した場合、かご内に掲示してあるエレベーターの認定証を取り外し、エレベーターを休止して、しかるべき部署に連絡するよう厳しく指導されています。それはエレベーターの故障により、乗客が長時間閉じ込められて死にかけた事件が原

読者からの寄稿 <<ミスターEのアメリカエレベーター情報>>

因です。

その日は金曜日の夕方、同僚も全員帰宅した後だったそうです。まだ携帯電話が普及してない時代で、ほかに外部へ連絡をする手段はありませんでした。

その方は月曜日の朝、極度に衰弱した状態で、出勤した従業員によって発見されました。かご内の照明も消えていたかもしれません。そんな状況で何日も、誰にも気づいてもらえないあせりや恐怖はいかほどのものでしょう。以来、非常電話が故障している場合、即座にエレベーターを使用禁止にしなければならなくなりました。

またアメリカでは、かご内にある非常用電話は受話器タイプが認められていません。押しボタン式である必要があります。なぜでしょうか？受話器はいたずらで破壊される、コードをひきちぎられることがあるためです。また、手が不自由であったとしても、あごや肩などでボタンを押して通話ができるメリットがあるからです。

現在は電話機と電話線に異常がある場合、乗り場のパネルにある赤いランプが点灯し、同時にアラームも鳴るようにすることが義務付けられています。(写真3)しかし、30秒間隔でたった1秒間だけ点灯 鳴動するアラームに乗客は気づくでしょうか。気づいてもエレベーターに乗るのを遠慮するでしょうか。まだ改良の余地がある規定です。



写真3 非常用電話の異常を知らせる赤いランプ

5. クリスマスパーティーの悪夢

クリスマスパーティーで酔っ払った男たちのストー

リーです。屈強な2人がロビーでケンカを始めました。取っ組み合っているうちに、エレベーターに行き着いたのでしょう。2人は昇降路のドアに突進。ドアシュー(米ではドアギブ)が外れ、すきまから2人は昇降路に転落。10階から5階に停まっていたかご上まで落ちたそうです。命は失いませんでしたが、特別な日の悲しい事故となりました。

アメリカでは2つのドアシューの間に、もう一つの外れ止めをとりつけ、補強をすることが義務付けられています。その名はホイストウェイドア リテーナー(写真4)。乗り場戸補強装置とでも訳しましょう。

5000N(約510kg)に耐える強度が必要です。事故の起きた乗り場戸には取り付けられておらず、2人のマッチョの突進には耐えきれなかった模様です。

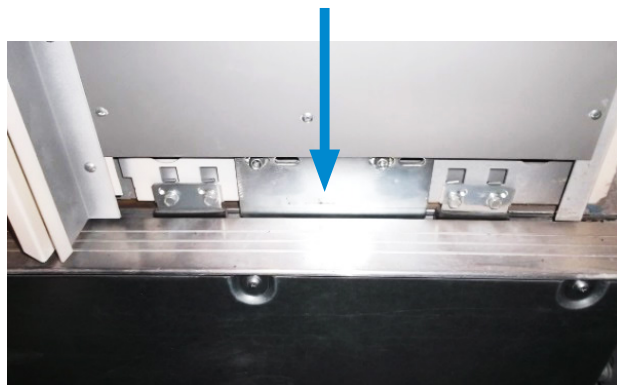


写真4 ホイストウェイドア リテーナー
(乗り場戸補強装置)

6. ジーンズにTシャツのメカニック in Hawaii

転落防止柵のないかご上。ハーネス 安全帯は着用せず。エレベーター技術員が、ジーンズにTシャツの格好で作業していました。説明不要で怖いでしょう。

7. 毎度おなじみ、脱線話

コネチカットで思い出したので脱線させてください。ロックスバリーという町へガーネット(ざくろ石)を採りに行ったことがあります。民家の庭で採れるのです。日本でもガーネットを採ったことがあります、1日頑張ると2ミリ程度のものが1つくらいです。

読者からの寄稿 <<ミスターEのアメリカエレベーター情報>>

その場所では門の前に車を止め、無断で敷地に入り、入場料代わりに2ドルの駐車料金を玄関マットの下に置いておけばオッケー。住人の方へ挨拶も必要なし。勝手に掘って、持ち帰り放題のふところの広いオーナーさんでした。

庭にはいつも人懐こくて、番犬には決してならない犬が放し飼いにされていました。その犬は私たちに尻尾を振って寄ってきました。頭をなでていると、まるで「付いて来なさい」と合図をするかのように歩き始めました。ついていくと、ある地点で急に立ち止まり、地面のおいをかぐようにして「ワンワン」と吠えるではないですか。なんだか聞いたことのあるような話です。

「せっかくだからここでやってみるか」と掘ってみたら、宝石になるような色ではありませんでしたが、大きくて綺麗な十二面体の結晶がザクザク出てきたのです。正直に生きてきたお陰かな…。



写真5 コネチカットのガーネット（直径30mm）

ところが先日、懐かしい気持ちでググってみたら、土地のオーナーが変わり、今は庭に立ち入ることを許してくれないそうです。知らずに敷地に入ったら、たとえ玄関マット下に10ドル置いたとしても、後ろから「両手

を上げて頭にのせろ」と言われていたかもしれませんね。

サウスダコタ州では小川をさらえて砂金採り。ユタ州のトパーズ山はまさにトパーズだらけ。モンタナ州では1週間前に1億円相当の巨大なサファイアがそこから見つかったとの新聞記事を見せてもらいました。アーカンソー州には世界で唯一、一般に公開されているダイヤモンドを掘ることができる州立公園さえあります。

ダイヤモンドは2~3日間探す予定でした。年間300個くらい見つかるそうなので、数日探せば自分が見つける幸運に恵まれるのではと思ったのです。見かけは畑のような土地ですが、地面は意外に固く重労働でした。

半日くらい探したとき、アメリカ人のご夫人が話しかけてきました。「あなたたち、取れました？私は4日もやってるけど、1つも見つからないから今日で終わりにするわ。」夕方まで頑張ってキープしておいた怪しいと思う石をスタッフに見せると、すべてただの石。1日であきらめました。この場所は定期的にトラクターで耕しているそうです。耕した直後がチャンスですよ。

ミスターEは、鉱物採集を趣味とするクラブの方々を、ツアー添乗員としてアリゾナ州にお連れしたことがあります。ペリドットという緑色の宝石の鉱山で、アメリカインディアンの保護区内にありました。鉱山の足元は砕けたペリドットで一面アップルグリーンに染まっていました。宝石が好きな人ばかりでしたので、責任者による長い注意事項の説明が待ちきれず、全員（私も含め）がなだれのようにフライングして掘り始めたのを思い出します。

アメリカにはこんな魅力もあります。それでは今回はへんで。次回はエレベーターにまつわる病気を特集しようと思います。